

平野山瓦窯覚え書き

——出土遺物の再整理——

肥後弘幸

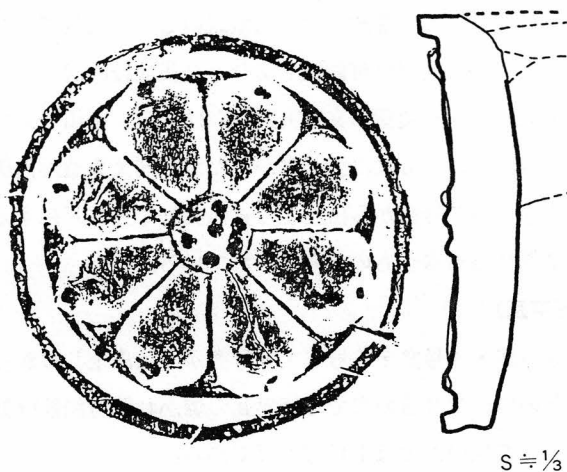
1. はじめに

平野山瓦窯は京都府八幡市橋本平野山88番地ほかに所在する飛鳥時代の瓦窯跡である。当瓦窯は丘陵の南側斜面に営まれた窖窯であるが、窯跡の所在丘陵の裾部付近が京都府と大阪府の府境になっているため、それぞれ別の遺跡名称が与えられている。大阪府側での遺跡名称は楠葉東遺跡第5地点である。大阪府側では昭和52年と54年に宅地開発に伴って枚方市文化財研究調査会によって発掘調査が行われ、四天王寺の創建瓦等を生産した我が国最古の瓦窯跡の1つであることが知られるようになった。昭和60年京都府側でも宅地開発に先立って八幡市教育委員会によって発掘調査が行われ平野山瓦窯と名付けられた。この調査は窯の遺存状況を調べ保存方法を検討する試掘調査であったが窖窯6基を確認しそのうちの1基をほぼ完掘できた。調査した部分はそのほとんどが窯体内であった。この発掘調査の概報は既に刊行されているが、刊行段階では遺物整理がはなはだ不十分であったため、その後、遺物整理を主に担当していた筆者が八幡市教育委員会から遺物を借りだし細々と整理を行っている。本稿はその整理作業の中間報告であり、出土遺物の概観を概報に加えて述べ、遺物ごとにその問題点を取りあげてみる。

2. 出土遺物覚え書き

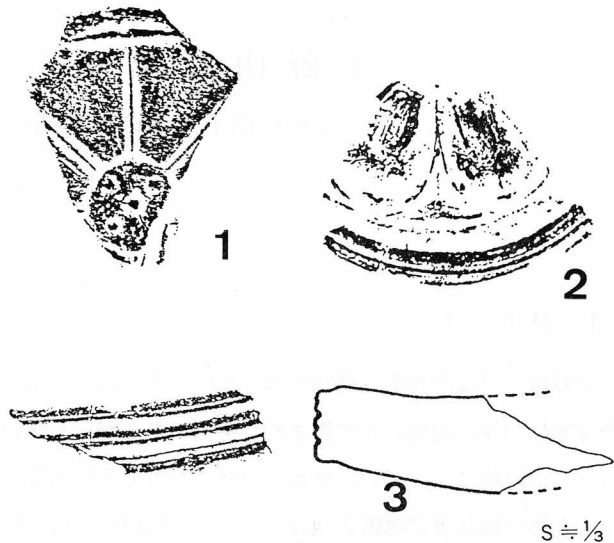
(軒丸瓦)

素弁八葉蓮華文軒丸瓦A (第1図) いわゆる四天王寺式軒丸瓦である。平野山瓦窯では3号窯・4号窯から出土した。この瓦の瓦頭範については従来からよく研究されており、まず法隆寺若草伽藍の造営に際して用い



第1図 軒丸瓦拓影(1)

られ、その後四天王寺造営に際して再び用いられたことが知られている。平野山瓦窯の調査に際して出土した同範の瓦は僅か3点にすぎないが、枚方市側の灰原からは20点ほど出土し、市では範の痛み具合から灰原内からは出土しない範に傷の見られない法隆寺若草伽藍出土のものを含めて5段階に分類している。すなわち法隆寺若草伽藍造営に用いられた瓦は平野山瓦窯で作られたものではなく、この範



第2図 軒丸瓦拓影(2) (2は瀬川芳則氏の論文から改変)

は四天王寺建立にあたって当地に持ち込まれたのである。ちなみに4号窯最終床面出土のもの(第1図)は第4段階にあたり、3号窯最終床面出土のものは最終段階(範廃棄直前)にあたる。

素弁八葉蓮華文軒丸瓦B(第2図1) 一般に奥山久米寺式と呼ばれるもので、弁端が剣先形を呈し弁端に珠粒を点するのを特徴とするものである。6号窯から出土した。これは素弁蓮華文軒丸瓦の中でも形式化の進んだもので、上記の軒丸瓦Aよりも後出のものである。機会があつて奥山久米寺出土のものを実見し比較検討することができ、同範の可能性が極めて高いことを知った。^(注1)同型式のものが久世廃寺からも出土しており、地理的にも極めて近いので同範の可能性もあり、今後比較検討することが必要である。

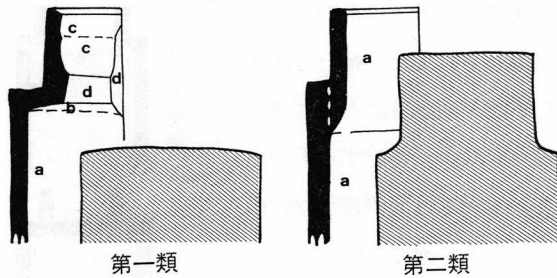
重圏縁単弁八葉蓮華文軒丸瓦(第2図2) 山田寺式につながる軒丸瓦である。平野山瓦窯の調査においては出土しなかったが、楠葉東遺跡内灰原から破片が出土している。これは従来から7号窯から出土する重弧文軒平瓦に対応するものと考えられており、四天王寺第2期にともなうものと考えられている。^(注2)

(軒平瓦)

3号窯・4号窯・5号窯・6号窯からは出土しなかった。特に厚手の平瓦も出土しなかったもので、これらの窯では軒平瓦の焼かれた可能性は低いものと思われる。平野山瓦窯で軒平瓦を焼いたのは7号窯だけである。

重弧文軒平瓦(第2図3) 型引きによる三重弧文の軒平瓦である。7号窯から出土した。

瓦当面での厚さ3cm余りを測る
無額の非常に薄いものである。
当瓦窯においては出土しなかつたが、先に述べたように灰原内から単弁八葉蓮華文軒丸瓦が出土しており、これとセット関係になると考えられる。



第3図 丸瓦模式図

(丸瓦)

2号窯を除く3・4・5・6・7号窯から出土している。いずれも玉縁式のもので、行基草式のもの是一片もない。また、すべて粘土板を木型に巻き付けて成形し、半乾燥ののち、半截したものである。概報においては玉縁部と円筒部の接合方法、及び木型の違いによって三類に分類したがここでは木型の違いによって二類に分類してみる。

第一類(第3図)

木型は玉縁部分までのびておらず、玉縁部分は回転成形によって作り出すものである。布目痕も玉縁部分までのびてなく、段部で絞り目を残して終わっている。木型は円柱状を呈したものが想定できる。窯体内から出土したものは4号窯出土の一点を除いてすべてこれに属するものである。

3号窯出土の丸瓦は出土した丸瓦の中でもっとも多いが、玉縁部分が十分観察できる資料はわずか6点である。全長のわかるものが3点ありそれぞれ37.0cm・36.7cm・29.3cmを測る。そのほかの法量は一定の傾向を示し、復元できる木型の直径は12.0cm~13.2cmである。玉縁部分と円筒部分は別々の粘土板を用いている。その接合方法(第4図1)は接合部の断面観察等から次の二つの方法が考えられる。一つは玉縁部分を木型の上に置きその上から円筒部分を重ね合わせる方法。もう一つは円筒部分を先に木型に巻き付けそのあとに玉縁部分を木型の上にのせるように重ね合わせる方法である。工程の手順としては前者の方が有効だと思われる。どちらかの方法で接合したあと新たに粘土を加えることなく、円筒部分の粘土を引き伸ばして丁寧に接合部分を補強している。接合後、玉縁部の内面はへら削りと横なでによって回転成形を行っている。円筒部外面には叩きしめが行われていたと考えられるが、横なでによって仕上げられており、叩き板の圧痕は観察できない。

概報で既に記載済みであるが、最終操業時に焼き台として利用されていた丸瓦の一つに榎木に固定する釘穴の目的で焼成前に穿孔されたものがある。器壁が他の瓦よりも厚いことから軒丸瓦の破片である可能性がある。

4号窯出土の丸瓦はいずれも破片でありその全長を知ることはできない。しかし、その

他の法量は3号窯出土の丸瓦とほぼ等しく、また、接合方法・成形方法・調整方法ともに差異はみられない。特記するものとして、玉縁部外面側端部付近にへらによる直線をもつものがあり、半截の目安としたものである可能性がある。

5号窯からは良好な資料を得ることができなかった。

6号窯出土の丸瓦は3・4号窯出土の丸瓦と比べて違った特徴を示す。全長を知ることので

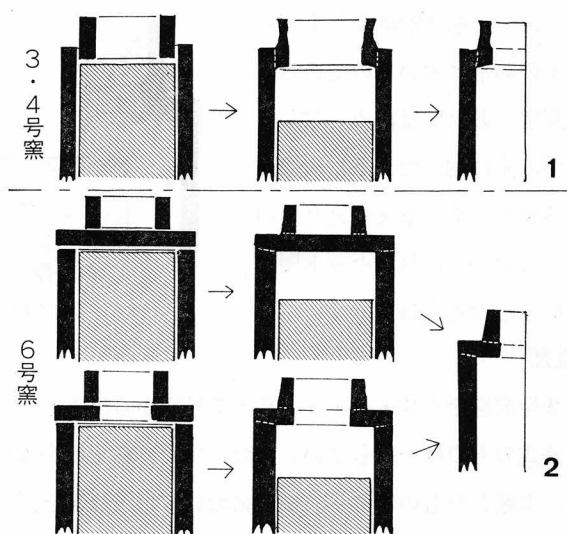
きるものはないが、法量がかなり大きいものと考えられる。復元される木型の直径は18.0cm～21.0cmを測る。器壁も3・4号窯出土のものが1cm前後であるのに対して1.5cm～2.0cmを測る。玉縁部分と円筒部分の接合方法(第4図2)も異なっている。木型に粘土板を巻き付け、粘土板を巻きつけた木型の上に円盤もしくはドーナツ状の円盤をのせ、さらにその上に玉縁部分をのせるという接合方法をとる。少量だが3・4号窯の丸瓦と同じ接合方法をとるものもある可能性がある。6号窯の丸瓦がこのような接合方法をとるのは、法量の大型化とそれに伴う重量の増加と無関係ではないであろう。調整技法でも変化が見られ、玉縁部内面の横なではほとんど行われなくなり、円筒部外面のなで調整も少し不徹底になったのか、叩き板の圧痕を残すものがわずかながら存在する。

7号窯からは玉縁部分の残る良好な資料は出土しなかった。玉縁部を欠いた破片を観察すると法量的には6号窯と変わらないものであるが、内面の布目圧痕を消そうとした形跡が窺える。

第二類(第3図)

木型が玉縁部まで延びており、大小の円柱を重ね合わせたような形を呈する。瓦には布目が途切れることなく玉縁部まで及んでいる。

この丸瓦は当瓦窯では極めて例外的存在で、3号窯付近包含層・4号窯窯体内・7号窯付近包含層から各1点ずつ出土しているだけである。玉縁部分と円筒部分の接合方法はまず木型の玉縁部分に粘土板を巻き付け、その上から円筒部分の粘土板を重複させて巻き付けるものである。重複させる部分すなわち接合面はきわめて広く、長さにして3～6cm



第4図 丸瓦接合模式図

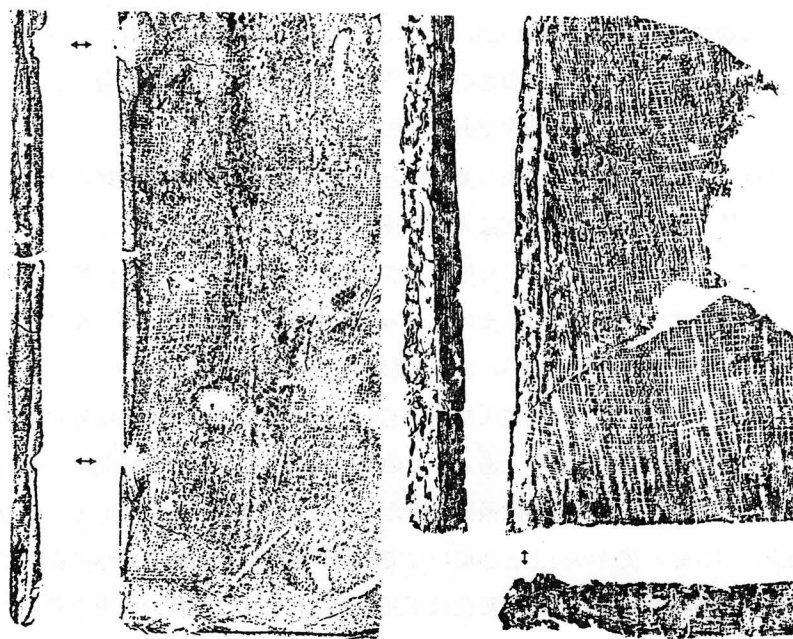
を測る。接合面を広くしているのは、二枚の粘土板の剥離を防ぐことを目的としていると考えられるが、一枚はこの接合面に沿ってきれいに剥離している。

最後に丸瓦の重要な問題点を一つ掲げておく。丸瓦には日本にその技術が伝わって以来、行基葺式と玉縁式とがある。先にも述べたように当瓦窯では玉縁式の丸瓦しか出土せず、行基葺式のもの是一片も出土していない。この事実と全く対照的なことが、木津川を挟んで対峙するほぼ同時期に操業していた隼上り瓦窯で見られる。隼上り瓦窯では玉縁式の丸瓦是一片も出土せず、行基葺式のもののみ出土するのである。この事実は平野山瓦窯では百済系の軒丸瓦で操業を開始し、隼上り瓦窯では高句麗系の軒丸瓦で操業を開始した事実と対応できないであろうか。すなわち、瓦生産の技術者集団としてある時期に、百済系の軒丸瓦を生産する集団は玉縁式の丸瓦を生産し、高句麗系の軒丸瓦を生産する集団は行基葺式の丸瓦を製作していたことがあったのではないだろうか。

(平瓦)

平瓦に関してはすでに概報で簡単にではあるが、検討をおこなっており、現段階ではまだそれを再検討するには至っていない。ここでは簡単に紹介するにとどめる。

平瓦はすべて平瓦桶巻作りによるものであるが、製作技法の違いから大きく3類に分類することができる。



第5図 平瓦分割指標拓影
左 分割界点 右 分割界線

第一類は3号窯・4号窯から出土した一群で、短く正方形に近い台形を呈する。凹面側に分割の時に目安とする分割突起の圧痕分割界点(第5図左)を残す。凸面側には主に縦方向のなでが観察でき、概して叩き痕は観察できない。粘土板が十分に締まっていなかったために焼成時に粘土内の空気が膨張し歪みを起こしたのが見られることと、粘土塊から粘土を切り離す時に生じた糸切り痕を残すものが見られることから、叩き締めを行っていない可能性が高い。3号窯出土のものの全長はおよそ34cmを測り、4号窯出土のものはおよそ39cmを測る。4号窯出土のものの中に3点ほど叩き板の圧痕と思われるものを残すものがある。

第二類は6号窯出土の一群である。全長は42.0cmを測り、縦に長い台形を呈する。分割の目安として分割突帯の圧痕である分割界線(第5図右)を用い、半截後側面を調整しないことを特徴とする。凸面は回転を利用した横方向のなで丁寧に調整してあるが、その下に僅かに痕跡をとどめる平行叩き圧痕を観察することができる。3・4号窯で多く見られるような歪んだものは非常に少なく技術的進歩が窺える。

第三類は7号窯出土の一群である。全長は42.0cmを測り、縦に長い台形を呈する。半截後側端部及び凹面に調整を施すことを特徴とする。側端部の調整のために分割の目安として何を用いたかが不明である。凹面の調整は、布目圧痕を消そうという意識のもとに行われているが徹底しきっていない。凹面は回転を利用した横方向のなでが顕著であるため、叩き圧痕を観察することはできないが、第二類と同様よく叩き締められている。

特記すべきものとして、格子目叩きの圧痕を残す平瓦の小片が一つ7号窯から出土している。ややぶ厚いので軒平瓦の破片である可能性が指摘できる。

当瓦窯では平瓦は第一類→第二類→第三類と明確な変化をとげる。特に顕著な変化である第一類から第二類への変化の中には大きな技術的变化が二・三見られる。一つは乾燥後の分割の目安となるようにあらかじめ桶に施される突起及び突帯である。第一類では桶の四方向に上下二つずつ突起を設け、その上から布を巻き付けている。第二類では桶の四方向に撚紐からなる突帯を設けている。分割突起から分割突帯への変化がここでは見られ、従来考えられていた「一つの造瓦工人集団においては、単一種の分割の指標が用いられていた」とする考えに相反するものである。この変化は第一類と第二類の間の時間的空白と^(注3)考え合わせてみて、当瓦窯の技術的系譜を考える上で見逃せないものである。他の変化として、凸面の叩き締め技術の向上と凸面のなで調整の縦方向から横方向への変化である。一つ目の変化もあわせて、これらの変化は平瓦の大型化に伴う技術的向上と考えても自然ではないであろう。

(須恵器)

当瓦窯からの須恵器の出土量はきわめて少なく、その資料価値についてはなんとも言えないのが現状であろう。しかし、大雑把にしる実年代を対比できる瓦と共伴しているため、その資料価値は高い。当瓦窯から出土したものは可能な限り図化し、概報に掲載したので、枚方市側の資料と合わせて十分検討していただければ有り難い。

3. おわりに

平野山瓦窯は、四天王寺創建を契機として操業を開始した国内で最も古い瓦窯のひとつである。窯は6基存在し、一番西には、2号窯と称する須恵器窯があり、東へ順番に3・4・5・6・7号窯と瓦陶兼用窯が続く。これらの窯は一時期に操業していたものではなく、2・3・4号窯がまず操業し(第一期)、次いで6号窯(第二期)、そして最後に7号窯が操業していた(第三期)ことが遺物からわかっている。第一期は四天王寺建立を契機とするもので、その時期は日本書紀に書かれている594年を大きく下ることはなく、7世紀初頭までの時期に収まるであろう。第三期は後期難波宮の造営に伴って、四天王寺が改築されるのを契機とするもので、650年前後が予測できる。第一期と第三期、その間半世紀近くの歳月があり、工房集団の中でも大きな変化があったことが予測され、事実、出土遺物もそのことを物語っている。

現在、平野山瓦窯の発掘調査が終了してから一年がたったが、その貴重な遺物は有効な整理が行われていない。偏に筆者の怠慢であり、誠に遺憾に堪えないことである。今回、「覚え書き」という形でここに記載させていただくのは複雑な想いである。なお、当瓦窯跡については調査の結果をふまえて保存協議がなされているが、調査に参加した1人としてよい方向に進むことを望んでいる。

(肥後弘幸＝当センター調査課調査員)

- 注1 平野山瓦窯発掘調査概報作成時に、奈良国立文化財研究所の大脇 潔・上原真人・岩本正二の三氏に、整理現場にお越し頂いた時に、奥山久米寺出土の軒丸瓦を拝見させて頂いた。
- 注2 瀬川芳則「四天王寺瓦窯址と出土の須恵器」『同志社大学考古学シリーズⅠ 考古学と古代史』同志社大学考古学シリーズ刊行会 昭和57年
- 注3 滝本正志「平瓦桶巻作りにおける一考察—粘土円筒分割のための指標について—」『考古学雑誌』第69巻第2号 昭和58年12月 日本考古学会 p-180 1.12

平野山瓦窯に関する参考文献

瀬川芳則「楠葉の飛鳥瓦窯(上・下)」『地域文化誌まんだ』8・10号 昭和54・55年

瀬川芳則・宇治田和生・三宅俊隆・桑原武志・西田敏彦「大阪府楠葉東遺跡内瓦窯群」『日本考古

学協会第46回総会研究発表要旨』日本考古学協会 昭和55年

西田敏彦「楠葉東遺跡内第5瓦窯」『枚方市文化財年報』(財)枚方市研究調査会 昭和55年

瀬川芳則「河内楠葉の飛鳥瓦窯群をもつ遺跡」『日本歴史』388 昭和55年

瀬川芳則「四天王寺瓦窯址と出土の須恵器」『同志社大学考古学シリーズⅠ 考古学と古代史』

同志社大学考古学シリーズ刊行会 昭和57年

瀬川芳則・中尾芳治「日本の古代遺跡11 大阪中部」保育社 1983

奥村清一郎・肥後弘幸・藤田靖子・古沢明彦「平野山瓦窯発掘調査概報」八幡市教育委員会 1985

『第32回研修会資料』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター・京都府教育委員会 1985